波乱の人生
前半

販売価格 ¥600(税抜き)

波乱の人生　前半

はじめに

2005年に日本からﾃﾞﾝﾏｰｸに帰国した。今まで7年間住んでいた日本を後にした。特に自分から帰国しようと思った訳ではなかった。帰国の飛行機の中では人生をゆっくりと振り返る事が出来た。不思議と今までの人生を物語るかのように台風の合間を飛行機は飛んで行った。乗るはずだった便には台風の影響で乗れずｷﾞﾘｷﾞﾘで別の便に乗り松山から関空に向かった。途中でﾊﾟｲﾛｯﾄのｱﾅｳﾝｽが流れた。台風の影響のため激しい揺れがあるかも知れないと。しかしこれは全く問題ないのでご安心くださいと。最近よくﾃﾚﾋﾞでの飛行機の事故ｼﾘｰｽﾞを見てきた僕はそのｱﾅｳﾝｽは一切信じなかった。飛行機はたまに落ちるものだ。しかし今回は落ちても何も損はしない。というかこの先の苦労を考えると落ちてくれた方が良いかも。この先の苦労が避けられれば如何に幸せなことか。少なくとも落ちて死ねば飛行機会社からの賠償金がもらえるだろう。それで元妻への借金も返せるからすべてが丸く収まるかも知れない。

40 歳に近く、しかも元外交官、日本の中小企業の取締役、自営業を経験しているにも拘らず持ち物はｽｰﾂｹｰｽ1つとﾊﾟｿｺﾝ1台、今着ているｽｰﾂと船便で送った今後のために取っておかなければいけない書類だけだ。ﾃﾞﾝﾏｰｸの家具は持っていたものの元妻はいらないというし、船でﾃﾞﾝﾏｰｸまで送り返すお金が無い。家族も失った。住むところも無い。何の保険も掛かっていないし年金なども全く積み立てていない。銀行の貯金は無いどころか借金がある。今後の見通しはというと全く分らない。今までの経験だけでこれからの生活の基盤が作り上げられるのだろうか。飛行機が落ちてくれればこんな心配はしなくて済む。

体力的にも精神的にもｸﾀｸﾀだ。過去 7 年間は殆ど休んでいない。それどころか一生懸命に日本での生活を築き上げるために走り回った。貿易を勉強し、会社ではやらなくても良いのに同僚にいろいろとﾊﾟｿｺﾝ関連のｱﾄﾞﾊﾞｲｽなどをやってきた。しかし今は何の役にも立っていない。結局日本を追い出された。過去 7 年間の成果は経験と借金以外に何も残らなかった。何のために朝、昼、晩、夜中働き続けたのか。

ここまで必死で頑張ってきた自分が愚かに思えてきた。しかし必死で人のために、自分のために働いてきた事を悪くは思いたくなかった。僕は商売人だ。しかし商売でも他人を誤魔化したり、他人に損を与えるような商売はやりたくないﾀｲﾌﾟだ。折角日本とﾃﾞﾝﾏｰｸの間のﾋﾞｼﾞﾈｽが出来る立場にいるから日本とﾃﾞﾝﾏｰｸの両方の国に役立つﾋﾞｼﾞﾈｽを選んできた

つもりだ。日本に役立つﾋﾞｼﾞﾈｽを紹介してきたつもりだ。しかし結果論から行けば僕は馬鹿の塊だ。何一つ得はしていない。それどころか持っているものすべてを失い、住んでいた国までを追い出され、これから先頼りに出来るものまで失った。返せない額の借金も出来てしまって絶望感で一杯だった。飛行機の中で涙ぐんでしまった。隣の人には気付かれないようにそっとｽｰﾂの袖で涙を拭いた。

飛行機は別に落ちても構わない。今まで何度も飛行機に乗っているがそのように思った事は一度もなかった。今回は落ちてくれれば楽になれると思った。もう生きるのは諦めた。どんなに頑張っても何一つ誰にも認めて貰えないのなら死んだほうがよっぽど良い。どうやら神様までが僕を見放してしまったようだ。大人になってから神様を信じなくなったのが悪かったのだろうか。しかし、信じなくなったからと言ってここまで人を罰するのは神様の役割ではないはずだ。神様がいるのであれば神様を信じてきた人は守るはずだ。神様が好んで罰するはずがない。

頭の中はもうごちゃごちゃだ。何を信じてよいのか分らない。唯一僕が欲しいのは僕を愛してくれて人生を共にしてくれる人だ。希望するのは贅沢なのだろうか。多くの人が自分を愛してくれる人に恵まれていない事は知っている。しかし人生は愛してくれる人が居なければとてもやっていけない。僕はこれだけが希望だ。しかし何故か僕には与えられない幸せのようだ。折角掴んだつもりの幸せも多くの問題を抱えながら 1 年足らずで終わってしまった。どうしてここまで来てしまったのか。自分のせいなのか。他人のせいなのか。それとも何なのか。果たして再度立ち直れるのだろうか。

一からやり直したのは初めてではない。しかし 3 回目になるとやる気がいきなり減る。一回目も二回目も駄目なのに何処から再度やり直す力を探し出せというのか。過去数年無理をしてきたから体の調子が既におかしい。ﾃﾞﾝﾏｰｸだったらｽﾄﾚｽとか何とか言って 2~3 年前から医者にかかっていたはずだ。しかしこれから日本で自営業を営もうと思っている人にそんな贅沢を言えるはずがない。無理をしてきたのだ。その支えになっていたのが妻だったのだが、今では「元」妻になってしまった。悪い事をしている訳でもないのに何もかもに見放されてしまった。

そう考えながら狭いｴｺﾉﾐｰｸﾗｽのｼｰﾄに座りながらｳﾄｳﾄと眠りについた。夢の中では今までの人生を映画館で見るかのように振り返っていた。同じ年代の人と比べて決して普通とは言えない経験だけは豊富な人生を送ってきた。

ﾃﾞﾝﾏｰｸで生まれた僕は両親の仕事の関係で 7 歳の時に日本に引っ越してきた。両親は宣教師でｷﾘｽﾄ教を日本人に広めるために来日した。神戸に 1 年ほど住んで語学を学んだ後、福井県の田舎に引っ越した。姉と妹と 3 人で日本の普通の小学校に通う事になった。日本語はその時に覚えた。当時字は汚かったものの日本語の読み書きは日本人の同級生にも負

けなかった。中学校 1 年生の試験の時に 240 人の生徒のうち国語が 23 位だった事が記憶に残っている。確か福井市の新聞記者が学校を訪れて記事にしたはずだ。その記事を読んだ事は無いが。算数は 9 位と勉強は誰にも負けなかった。

子供の頃から父からはｷﾘｽﾄ教を信じる事を強いられ、かなり熱心な信者だった。幼いながらもｷﾘｽﾄ教の布教が自分の使命だと感じていた。10 歳ぐらいの時に洗礼を受けひたすら神様の為に人生を歩み始めた。ｷﾘｽﾄ教を信じない人は地獄に落ちてしまうと信じていた為、例え馬鹿にされても、例え殺されても、布教活動は続けなければと一生懸命だった。

中学校 2 年生になって間もない頃、急にﾃﾞﾝﾏｰｸに帰る事になった。元々両親が教会から大した金額を貰っていた訳でも無かったが、今まで教会から貰っていたお金が貰えなくなり、両親が反対する中ﾃﾞﾝﾏｰｸへの帰国が 1 ヶ月程で決まった。僕たち 3 人兄弟は勿論何も反論出来ずそのまま両親の後をついてﾃﾞﾝﾏｰｸに戻った。子供だったから当時は憧れのﾃﾞﾝﾏｰｸにやっと帰れると思った一方、不安で一杯だった。ﾃﾞﾝﾏｰｸは日本の学校のように厳しくないと聞いていた僕はﾃﾞﾝﾏｰｸに戻れば学校は楽が出来るとも思っていた。しかし 7 年半ﾃﾞﾝﾏｰｸに一度も帰国せずに日本で育ったため母国ﾃﾞﾝﾏｰｸの事は全く知るはずも無く何が待っているのかも分からなかった。

ﾃﾞﾝﾏｰｸに戻って来た時の最初の印象は頭が一杯で、処理し切れなかった。初めて見た御伽話のような小さなﾚﾝｶﾞの家。会った事の無い親戚との初めての挨拶。日本で覚えた物とは全く異なる習慣や考え方。ﾃﾞﾝﾏｰｸの学校に通い始めたが、ﾃﾞﾝﾏｰｸ語の読み書きが出来ず日本では勉強好きで常にｸﾗｽのﾄｯﾌﾟ成績だったのがいきなり出来ない子になってしまった。日本の理科の授業で習った単語がﾃﾞﾝﾏｰｸ語ではさっぱり分からず馬鹿扱いされた。数学も得意だが単語が分からないから問題の内容が理解できない。英語になるとﾃﾞﾝﾏｰｸ人は得意で僕よりはだいぶ進んでいた。ついて行けない。ﾄﾞｲﾂ語は聞いた事も無かった。しかしﾃﾞﾝﾏｰｸの同じ学年の子は既に勉強を始めて二年目に入っていた。とにかくまずはﾃﾞﾝﾏｰｸ語を覚える事から始めなければいけない毎日だった。しかしﾄｯﾌﾟ成績からいきなりﾋﾞﾘまで墜落したような気分でｼｮｯｸは大きかった。後になって分かったのだが、これがいわゆるｶﾙﾁｬｰｼｮｯｸだった。しかしｶﾙﾁｬｰｼｮｯｸという単なるひとつの単語で表すのにはあまりにも複雑な気がする。

中学校は何とか卒業でき、高校に進んだ。算数や数学が得意で、日本と何らかの関係を保ちたいと思った僕は商業関係の高校に入った。高校も何とか卒業したが、成績があまり良くなく結局はﾚｼﾞの仕事に就いた。音楽に興味を持っていた僕はいずれﾌﾟﾛのﾄﾞﾗﾏｰになりｷﾘｽﾄ教の布教に役立てようと決心し姉と姉のご主人とﾊﾞﾝﾄﾞを組みひたすら音楽の道を進み始めた。ﾄﾞﾗﾑはそこそこ出来るようになり一時期地域のﾌﾞﾗｽﾊﾞﾝﾄﾞにﾍｯﾄﾞﾊﾝﾃｨﾝｸﾞされたが断った。ﾚｼﾞの仕事に半年ほど就いたが延期を断り失業し更にﾄﾞﾗﾑに熱中した。

ｽｳｪｰﾃﾞﾝのｷﾘｽﾄ教関連の学校に２ヶ月ほど通いながらﾊﾞﾝﾄﾞをやったが、ﾊﾞﾝﾄﾞはｽｳｪｰﾃﾞﾝで壊れ人生でも最初の大きな失敗を経験した。お金も時間もすべて投資し賭けてきたﾄﾞﾗﾏｰの夢が一瞬にして崩れた。僕は昔から 100 か 0 かと言われているが、まさしくその通りかも知れない。ﾄﾞﾗﾏｰには 100%賭けていて失敗した時には何もかもを失ったような気がした。2 度とﾄﾞﾗﾑはやらないと決心したのが今から 20 年前で、それ以後ﾄﾞﾗﾑを叩いた事は無い。その後人生では 100 か 0 かを何度も繰り返した。この性格が成功に繋がったり失敗の原因になったりしている。ｷﾘｽﾄ教育ちの影響なのか、何かが正しいと思ったら止まらない性格だ。頑固といえば頑固かも知れない。

ｽｳｪｰﾃﾞﾝから戻って来て人生を一からやり直そうと今度は教会のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱを始めた。とても感じの良い教会で牧師さんは尊敬できる人であり若者も多くとても楽しかった。しかし神様に対する疑問が次第に多くなり牧師さんと喧嘩してﾎﾞﾗﾝﾃｨｱでありながら教会を「首」になった。ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱでありながらも首になるとは大したもんだと思った。ｷﾘｽﾄ教に関する疑問は 20 歳の頃から次第に多くなり 30 歳の時には完全にｷﾘｽﾄ教との関係を切りその後一切神様を信じ頼る事は無くなった。しかし子供の頃から受けたｷﾘｽﾄ教の教育とは強いもので、未だに考え方として間違っていると思いながらもなかなか捨てる事が出来ない物がいくつもある。

無職だった僕は今度は知り合いの紹介でﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰを試みた。仕事はすぐに見つかるという事でとにかく再ｽﾀｰﾄをしなければいけない僕には救いだった。夜勤で働いていた僕は人間の一番嫌な性格に毎日さらされる事になった。ﾀｸｼｰのお客さんはﾋﾟﾝからｷﾘまでで、地位の高い人から低い人、若者から年寄り、病人やﾎｰﾑﾚｽなどあらゆる人だった。しかし最も多かったのが酔っ払いだった。教会にいたころはこのような人生に希望を失った人を助けてあげたいと思ったが、ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰとしてはこのような酔っ払いは迷惑だった。酔っ払い、喧嘩、売春。ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰとしては危険も多く、仕事上命の危機を感じるとｱﾗｰﾑﾎﾞﾀﾝを押し他のﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰに知らせる仕組みになっている。幸い自分では押した事は無いが、脅された事もあればお金を支払わずに逃げられた事もよくあった。同僚のｱﾗｰﾑに最初に駆けつけて暴れている男性をﾀｸｼｰから引っぱり出した事もある。ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰの 4 年間は人間のどん底を見る事になったが、人間を知る上で凄く勉強になった。

ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰとしてはそこそこ儲かったが将来性は全く無かった。やはり元々目指していた日本関係で何らかの仕事に就きたいと思うようになった。そこへ教会の知り合いが現れ大学に入学し日本語を勉強する事を勧められた。お金を稼いでいる時に仕事を辞めて大学に入るという事は金銭的に辛かったが、これがおそらく最後のﾁｬﾝｽだと思った僕は思い切ってﾀｸｼｰ業界を離れ大学に入学した。入学すると殆どすぐに僕の日本語力が町の日本人の間で噂になり大学に入学して 1 ヶ月も経たないうちに最初の日本語を使ったｱﾙﾊﾞｲﾄの仕事が入った。日本人の福祉関連のﾂｱｰの通訳だった。専門用語は分からなかったが、とりあえず通訳しながら少しずつ覚えていった。それから大学に 2 年ほど通いながら

波乱の人生　前半

日本語を使ってのｱﾙﾊﾞｲﾄを続けた。ﾃﾞﾝﾏｰｸの福祉政策、老人ﾎｰﾑなどを回ったり、日本人の福祉関連団体と一緒に自分も行った事の無かった北欧の観光ｽﾎﾟｯﾄを片っ端から訪問した。日本語を磨き、日本の事を学び日本への憧れが次第に大きくなりいつしか日本に戻りたいと願うようになった。

大学は２年もいると同級生や先輩の事が少しずつ分かってくるようになる。話を聞いているとまず日本語学科を専門家として卒業したのは日本語学科が存在した26年間に２人だけだと知った。しかも日本関連の仕事には就いていないとか。個人的には特に大学を最後まで卒業したいという希望は無かった。日本語学科に入学したのはあくまでも日本と関連を持ち日本関連の仕事に就くための一つのｽﾃｯﾌﾟであり、卒業する事自体が目標ではなかった。特に古典などの勉強を始めると日本語もろくに出来ない外国人が古典についてはやけに詳しい事を見て大学での資格の価値に疑問を感じた。目標は就職する事だった。そこで逆に日本で仕事に就いている人はどんな資格を持っているのかを調べ始めた。二通りあったが、専門知識を持って日本語は特に出来ない人、そして何かの専門知識と日本語の能力を組み合わせた人の 2 ﾊﾟﾀｰﾝだった。日本語の資格のみで面白そうな仕事に就いていた人はいなかった。大学の教授という職ならば勿論日本語の資格だけでも出来そうだったけれど、興味は無かった。おそらく僕の頭では大学の教授などは出来っこなかっただろうし。日本語だけでまともな就職は無理だと分かった僕は、貿易なら自信があると思い大学を中退し、ﾃﾞﾝﾏｰｸ輸出専門学校に入学した。

ﾃﾞﾝﾏｰｸは福祉で有名な国であり、教育費はすべて無料である。しかし僕が選んだ輸出学校はﾃﾞﾝﾏｰｸ国内でも数少ない私立学校で教育費が高かった。しかしその代わり就職する確率はどこよりも高いと評価されていた。学校は企業との綿密な接点を重要視しており勉強するにも就職するにも非常に良い選択肢に思えた。大学を中退し半年ほどﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰに戻りお金を稼ぎ、足りない分は自分で銀行からお金を借りて学校に通った。勉強は順調に進み物を売るという事や輸出に関しての知識をどんどん身に付けて行った。ﾀｸｼｰ時代や大学時代に覚えたﾊﾟｿｺﾝのｽｷﾙを思い切り使い学校では生徒にﾊﾟｿｺﾝを教え、学校のﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞは夏休みを掛けて立ち上げ、校長先生とは非常に良い関係を作って行った。

女性と初めて付き合ったのもこの輸出学校で勉強している時だった。30 歳になっていた。今時非常に遅いと思われるかも知れないが、これにはいろいろと事情があった。特に僕が育てられたｷﾘｽﾄ教の考え方では性的な考え方が厳しかった。結婚していない女性と性的な関係を持つという事は非常に重い罪だと考えられていた。この考え方を捨てる事は今までの自分が我慢して来た事を全く無意味だという風に否定しなくてはならず、人生で最も辛い選択だっただろう。しかし僕は思い切ってｷﾘｽﾄ教の自分の中の最後の欠片を捨てた。初めて女性と付き合うのと同時に 20 年以上信じ続けてきたｷﾘｽﾄ教をようやく後にする事ができ 30 歳でありながらやっと自立出来た。

学校での卒業を 3 ヶ月前に控えたある日、校長先生が「日本の大使館でお前みたいな人を探してるよ」と新聞記事を持って来てくれた。輸出専門学校では自分を売り込む事をいつの間にか覚えてかなり上手くなっていた。校長先生から記事を貰った僕は早速その知恵を活かし商務担当官としての申請書を送った。1000 人近くの希望者の中から僕が選ばれる訳は無いと分かっていた。だからこそ賭けに出易いところもあった。日本にたまたま行くきっかけがあった僕は大使館を訪問し職員に日本語で喋り担当の商務参事官に自分をｱﾋﾟｰﾙして来た。まさか日本まで仕事を申請に来る人は他にいないだろう。ﾃﾞﾝﾏｰｸに戻り数日後に面接に呼ばれた。就職面接にはわざと遅刻し他にも面接があり引っ張りﾀﾞｺになっている事をｱﾋﾟｰﾙした。面接では自分が仕切ると切り出しすべてをｺﾝﾄﾛｰﾙし日本以外の外務省が募集していた所には興味が無いと強気で出た。それが見事実を結び 1998 年 10 月から日本のﾃﾞﾝﾏｰｸ大使館で商務担当官として就職する事になった。身分は学生からいきなり外交官だ。今でも思い出すと怖いのだけれど、面接の時に英語を話せと言われてしまっていたらおそらく受からなかっただろう。本当に英語は苦手だ。しかしﾃﾞﾝﾏｰｸでは英語は皆出来るものだと思われている。

大使館に入る数ヶ月前は再度ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰとして生活費を稼ぎ 1998 年 10 月 10 日に外交官の身分で来日した。大使館のﾄﾞﾗｲﾊﾞｰが空港まで迎えに来てくれて初めてﾌﾞﾙｰﾅﾝﾊﾞｰの車に乗った。憧れの日本にやっと戻れた。それも地位の高い仕事に就き将来は明るい。自分がここまで這い上がる事が出来るとは夢にも思っていなかった。正直外交官がどんな地位なのかはよく理解せずに日本にやって来た。

大使館では様々な経験をする事になった。給料は高く、表参道の豪華なｱﾊﾟｰﾄに住み、ﾌﾞﾙｰﾅﾝﾊﾞｰを乗り回し、家ではﾊﾟｰﾃｨｰを開き、高いﾚﾍﾞﾙでの企業との付き合いがあった。毎日のようにﾃﾞﾝﾏｰｸ企業の日本進出に関するｱﾄﾞﾊﾞｲｽ業務を行い、いろんな企業の社長との話や市場調査などを続けた。次第に日本で売れるものと売れないものの区別がつくようになった。駐車違反をしても罰金は取られず、空港に行けば自衛隊の人に挨拶され、多くの人から見れば憧れの 4 年間を送った。有名な日本企業の社長さん達と名刺交換したり、たまにはﾀﾚﾝﾄさんと出会ったり、国会議員と会ったり、天皇に招待されたり、それはそれは贅沢な日々を送った。日本国内で仕事をしていながらﾃﾞﾝﾏｰｸの労働条件という贅沢な仕事環境にも恵まれていた。そのため、休みになると日本中を車で走り回っていた。残念ながら何故か外交官になっても結婚相手にだけは恵まれず寂しい毎日を過ごしていた。

大使館での就職を 2 年契約から 4 年に延長してもらった頃、一生に一度しか無いと思える商品に出会った。水を使わない小便器だった。おかしな商品だと思えるかも知れないが、真のﾋﾞｼﾞﾈｽﾏﾝならば分かる。環境に優しい商品、水道料金が「0」に出来る、日本では出回っていない商品、海外の実績は凄かったしﾃﾞｻﾞｲﾝも良い。清掃が簡単でしかも小便器独特の悪臭が無い滅多に無い優れものだった。最初は Toto や Inax に持ち込んだが興味ないと言われた。日本では正しくやれば成功どころかﾃﾞﾝﾏｰｸ輸出の記録も作れると思った。この商

品に賭けようと考え日本の会社に提案してみた。2 年掛けてようやくこの商品に賭けても良いと考える日本の会社と巡り合い、ﾃﾞﾝﾏｰｸの会社も是非僕と提携し日本市場を取りたいといって来た。これで将来の夢への道は築けたと思った。大使館を退職した 2002 年の 10 月からは日本の会社に就職し水無し小便器の輸入販売に努めた。大手のｾﾞﾈｺﾝから鉄道会社、公的機関、ﾎﾃﾙや日本の大手ﾚｽﾄﾗﾝﾁｪｰﾝと沢山の実績が出来ていった。僕は取締役として日本の会社に就職していた。大使館では多くの企業の成功や失敗を見てきたが実際に商売に携わったのは日本の会社に就職してからが初めてだった。日本の企業では厳しい日本流の労働環境を経験した。朝礼、ﾗﾝﾆﾝｸﾞや国歌斉唱、ｻｰﾋﾞｽ残業、土日も働いた。恐怖の社員教育にも行かされたがこれは思ったほど怖くは無かった。社長には怒鳴られる日々が続き同僚からはどうやら羨ましがられていたようで根拠も無い事で社長に告げ口されたりした。しかし気にならなかった。何故なら僕には目標があった。数年この会社に勤め、日本での永住権を取得し自分の会社を立ち上げて更に多くの日本とﾃﾞﾝﾏｰｸの間のﾋﾞｼﾞﾈｽを築く事だった。社内の小さな人間の言う事は気にならなかった。何でも好きな事をやっていれば良いと思った。

1 年以上休まずに働いた。一生懸命に働いた。ﾃﾞﾝﾏｰｸとのやり取りや日本の企業への売り込みや営業、人を雇ったり、社内の様々な仕組みを作り上げたり、日本語の取扱説明書を作ったりで多くの仕事を経験する事が出来、すべてこなした。上手く行けば相当の収入も確保でき将来への夢は膨らんだ。しかしいくつかの問題が発生し夢は悪夢へと変わっていった。社長と喧嘩して会社を首になったのだ。解決提案を沢山出したがどれも社長は納得行かなかったようだ。5 年の雇用契約だったのがたった 1 年で首になった。どうすれば良いかを多くの人と相談し日本では喧嘩別れだけは避けた方が良いと言う事をｱﾄﾞﾊﾞｲｽされた為、社長にはいろいろと有難う御座いました、今後も宜しくといったようなﾒｰﾙを送って何も要求せずに会社を素直に辞めていった。今考えれば大きな間違いだった。ﾃﾞﾝﾏｰｸ人であれば雇用契約書を元に裁判を起こしていたが僕は郷に入れば郷に従えという諺の元に判断した。何がどうあれ、一瞬にしてすべてを再度失ったのだった。

振り返ると非常に複雑な気持ちだ。社長とも凄く良い関係で始まったﾋﾞｼﾞﾈｽが最後は泥沼のように何が何だか分から無くなっていた。会社を首になった理由もよく分からなかった。しかし会社を辞めてすぐにｺﾋﾟｰ商品が出回っていた事の確認ができ、社内で聞いていた噂が本当だった事が分かった。首になった原因が分かった。社長の行動は分からないでも無いが僕にとっては大きく損をする事に繋がった。納得行かなかった。人間的に良い性格を持っている社長でありﾋﾞｼﾞﾈｽを始めた頃はお互いに尊敬していたのが残念ながら崩れて行ってしまった。勉強にはなったが正直ここまで勉強はしたくなかった。心が痛かった。

日本の会社に就職している間に日本人の女性と出会っていた。会社を首になった時点で滞在許可と労働許可は切れるため僕は本当はﾃﾞﾝﾏｰｸに帰らなければいけなかった。しか

し彼女とは結婚する予定で居たので、お互いに結婚の時期を早める事にした。彼女には 7 歳の子供が居た。いきなり日本の家族になっていた。会社を首になって、住んでいた家を追い出された上で日本の妻を迎えて今度は何らかの仕事で収入を得なければならなかった。大使館時代にはﾃﾞﾝﾏｰｸの企業へのｱﾄﾞﾊﾞｲｽとして日本でのﾋﾞｼﾞﾈｽは少なくとも 3 年はかけなければ立ち上がらないという風に説明していた。しかし僕の場合は水無し小便器にすべてのお金を投資し失っていたため自営業を立ち上げて第 1 日目から利益を上げなければいけない状態だった。無理な話だったが何とかやるしか無かった。彼女にお金を借りてﾋﾞｼﾞﾈｽを始めた。いくつかのﾃﾞﾝﾏｰｸ企業を当たってみたところ展示会用品が何とかﾋﾞｼﾞﾈｽになりそうだった。会社立ち上げからﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ作成、営業、ｸﾚｰﾑ処理、輸入業務などなど、すべてを自分で担当しなければいけなかったが、少しずつ立ち上がっていった。しかし経済的には相当厳しくなっていて家賃を払う事が出来ず僕は彼女の実家の四国に引っ越さざるを得なかった。外国人でありながらの単身赴任の1年が始まった。彼女はﾋﾞｼﾞﾈｽが立ち上がり次第四国に来る予定だったのだが、いつまで経っても来てくれなかった。会社は少しずつ立ち上がりやっと黒字になりそうな頃、彼女は疲れたのか離婚をして欲しいと言われた。断れば良いのだが、それもおかしな事だと考え、離婚も素直に受け入れた。また人生のどん底に落ちた。すべてを失った。もう何度目か分らない・・・

僕の労働許可と滞在許可は結婚していたからこそ下りていた。しかし離婚したとなると、滞在許可も労働許可も失う事になる。日本には合計14年間の滞在履歴があり、日本語ができ、尚且つ日本にはいろんな意味で貢献してきたにも関わらず、入国管理局には永住権は与えられないと言われ止むを得ずﾃﾞﾝﾏｰｸに帰国する事になった。家族を失い、滞在許可と労働許可を失い、やっと黒字を出しかけていた会社を閉鎖し、借金を抱え、唯一の所用品であるﾊﾟｿｺﾝ1台と洋服だけを持ってﾃﾞﾝﾏｰｸに帰国せざるを得なくなった。

眠りから目が覚めた。ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙに近づいたらしい。日本からの帰国の飛行機はｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ経由で24時間以上かかった。本当はずっと寝ていたかった。また一からやり直す力はもう無かった。しかしそうは言ってもﾃﾞﾝﾏｰｸに戻れば厳しい現実が待っている。どこかで消えてしまおうかとも考えた。飛行機を途中で降りてあても無くどこかへ…でもそうも行かない。元妻への借金を必ず返すと約束していた。必ず借金を返す。「逃げた」とは言われたくない。絶対に借金は返してみせる。それが多分これからの力の源になるのだろうと思った。

再度戦いが始まった。

目次

僕はﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰの中でも体が非常に小さく、この人だったら怖くないとお客さんが思っていたのか、本当に良くお客さんに逃げられた。いやになるほど経験した。ｵｰﾅｰは僕が売り上げをごまかしているのではないかと疑う事もあった。自分にとっては本当に困ったことだった。そんな中一回だけ「犯人」を殆ど捕まえることに成功した。

ある日町の中心部で 3 人の男性を拾った。話を聞くとどうもｺﾍﾟﾝﾊｰｹﾞﾝからｵｰﾌｽに遊びに来た人らしくｵｰﾌｽの地理が良く分からないようだった。行き先の方向をとりあえず聞き出し近くまで来たら分かるからまたそこで指示するという。3 人の男性は皆ﾌﾞﾙｰのｼﾞｰﾝｽﾞと白いTｼｬﾂを着ていた。ﾃﾞﾝﾏｰｸでは通常ﾀｸｼｰに乗り込む場合、最初の人は運転手の助手席に座る。その後が後部座席だ。今回は 3 人だったため助手席に一人と後部座席に二人が乗った。途中ではいかにもｵｰﾌｽの事が分からないかのようにいろいろ質問された。目的地の近くまで来ると見覚えがあったらしく指示された。ｼｮｯﾋﾟﾝｸﾞｾﾝﾀｰがあり、その駐車場の自転車道路の入り口で止まってくれといわれた。その通りにした。そして車を止めた。車が止まったとたん、それが合図だったのか三人とも車のﾄﾞｱｰをいっせいに開け、そして車を出てﾄﾞｱｰを閉めて自転車道路を駆け上がっていった。一瞬の出来事だった。これだけ親切にｵｰﾌｽの事をいろいろ教えてあげて、これがお礼かよと、怒りが込みあがってきた。時間は夜中の 3 時ぐらいだった。そして真冬で道が凍っていた。その時はﾍﾞﾝﾂのｽﾃｰｼｮﾝｶｰを運転していた。3 人とも車のﾄﾞｱｰを閉めてくれていたので車はすぐに発進できた。彼らはまさかﾀｸｼｰが自転車道路を走って追っかけてくるとは思わなかっただろう。でもいつも支払いから逃げられて悔しい気持ちを抑えられなかった。飲みに行って半分酔っている男性を車で追いかければ、彼らが先に疲れ果てるはずだと考えて思い切って発進した。道路は凍っていたため思い切りｽﾋﾟｰﾄﾞを踏めば車はｸﾙﾘと回り自転車道路に上がれる。そして彼らを車で追いかけた。自転車道路は狭く曲がりくねっていた。でも何とか彼らに追いついた。そして一番遅い奴がﾀｸｼｰに気付き転んだ。轢きそうになった。彼はまた立ち上がり走り始めた。追いかけた。数百ﾒｰﾀｰ走ったところで自動車が入れないようにするための鉄棒があった。車で追いかけられるのはここまで。車を出て彼らの行き先を確かめた。すぐ近くの家に走りこんでいくのが確認できた。後は地図で住所を確かめて警察に連絡だと思ってﾀｸｼｰに戻った。狭い自転車道路をﾊﾞｯｸで出た。そして近くの公衆電話ﾎﾞｯｸｽから警察に電話を入れた。

たった 60 ｸﾛｰﾈの売り上げから逃げられていたため警察が来る訳が無い事は知っていた。しかしお客さんに逃げられるのにｳﾝｻﾞﾘだったし、彼らはおそらくまた同じ事をやるだろうと思ったらｷﾞｬﾌﾝと言わせたかった。警察に電話を掛けてこう言った。「今、お客さんが 60 ｸﾛｰﾈの代金から逃げた。居場所は突き止めた。たった 60 ｸﾛｰﾈだから警察が来ないというのなら暴力を振るってでも自分で取りに行く。来てくれますか?それとも自分で物事を解決した方が良いですか?」警察ではたったの 60 ｸﾛｰﾈじゃないかと言うため、じゃぁ自分で行きますと言って電話を切ろうとした。さすがに警察もここまで言われると行動しな

い訳には行かない。落ち着けとか言われて後 15 分で行くからおとなしく待ってろと言われた。15 分後には警察がやってきた。場所を教えた。最初に警察だけが中に入った。中には 10 人ほどいた。ﾀｸｼｰの料金をごまかした覚えのある人は一人も居なかった。そこで警察に呼ばれた。逃げた奴を教えてくれと。中に入ってびっくりした。なぜなら青いｼﾞｰﾝｽﾞと白いTｼｬﾂを着た同じぐらいの年齢の顔も髪型も大して変わらない奴が8-9 人ほど居たのだ。これじゃ誰が誰かは分からない。悔しかったけれど結局は逃げられた。でも彼らはおそらく二度と同じ事をやらないだろう。そして僕は非常に気持ちが良かった。

ﾀｸｼｰ業界はこういう事が多い。ﾃﾞﾝﾏｰｸでも地位が最も低い仕事と考える人が少なくはない。昔は掃除のおばさんが一番軽蔑されていたが、ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰはそれ以下に軽蔑される事が少なくなかった。しかし、僕は失業しているよりは自分のお金をしっかりと自分で稼いでいるから、ﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰである事に対してﾌﾟﾗｲﾄﾞを持っていた。たしかに自分の新しい価値観では地位と力というのは大きかったが、今はﾀｸｼｰﾄﾞﾗｲﾊﾞｰであって高い地位や力を求める場合では無かった。

時間が経つに連れ多くあるﾀｸｼｰ業界の問題はひとつひとつ対応できるようになってくる。かなり早いうちから覚えるのが、絶対にお客さんに振り回されないことだ。例えば僕はﾀﾊﾞｺが苦手だ。苦手どころか、当時はﾀﾊﾞｺの煙にさらされると涙は出るし声がおかしくなりｾｷをするぐらいだった。どうしてもお客さんにはﾀﾊﾞｺを吸わせない方法を考えなければならなかった。しかしお客さんから見ればお金を出して乗っている訳だからﾀﾊﾞｺの一本ぐらい吸わせて欲しい。早い段階から気付いた事だが、「ﾀﾊﾞｺは出来れば車内ではご遠慮ください」、という運転手からの丁寧なお願いに対して断るお客さんは大体その他にも問題を起こす事だ。だから始めから乗せない方が得だと分かった。どうしてもﾀﾊﾞｺを吸いたい人は断る事にした。売り上げがあまりあがらなかったのもこういう事のせいかも知れないが、ﾀﾊﾞｺの煙にさらされるよりはましだった。それでもﾀﾊﾞｺを吸う事を断ると怒ったりする人が多く何か他の手を考えなければと思った。そこで絶対にお客さんが断ったら乗せる価値の無い人だという決まり文句を考えた。それはこうだった。「この車は喘息を持っている子供を学校の送り迎えの特別車として認定されている為、ﾀﾊﾞｺはご遠慮願いたいのですが・・・」という決まり文句だった。そんなの嘘だった。しかしさすがにこう言うとお客さんは逆に火を消す事で何だか自分がその子供たちに貢献しているような気持ちになりお願いすれば何でもやってくれるのじゃないかと思えるほどの良い雰囲気になるのだ。本当に不思議なものだ。ここまで言われてお金を払ってるからﾀﾊﾞｺを吸わせてくれというお客さんは本当に乗せたくなかった。必ず断った。

それでもこういう事があった。たった 500 ﾒｰﾄﾙしか走らないのにﾀｸｼｰでﾀﾊﾞｺを吸わせてくれと乗ってきた人がいた。ﾀﾊﾞｺを断られても聞かず車に乗り込んでﾀﾊﾞｺに火をつける奴がいた。そういう場合は僕は特に急いでいる訳でも無いからｴﾝｼﾞﾝを切った。そして窓を全開にした。ﾀﾊﾞｺに火が点いてる内は動かない。本当に頑固かも知れないけど、ﾀｸｼｰ業

界にいるといろんな意味で自分の自己主張をしなければやっていけないのが現状なのだ。そんなある人が町の中心部から 500 ﾒｰﾄﾙ程走ってくれと入ってきた。ﾀﾊﾞｺを断られてどうしても聞かない。僕はｴﾝｼﾞﾝを切った。他の車が沢山あるのだから急いでいるのだったらその車のどれかが喫煙可能なはずだから他の車に乗ってくれとお願いした。お客さんは僕と同じぐらい頑固で車を降りようとしない。僕も動かない。最後にはﾀﾊﾞｺも吸い終わったせいか、もう吸わないから走ってくれと言われた。お客さんも落ち着いたのかなと思って 500 ﾒｰﾄﾙだから大丈夫かと思って走り出した。走り出してすぐに彼はまたﾀﾊﾞｺを取り出した。さすがにここまで馬鹿なお客さんはなかなか居ない。その場で車を止めた。しかし彼は「走り出さないとぶん殴るぞ」と脅してきた。でもこれも僕は経験済みで間違いない解決方法を見つけていた。「今のは脅しだったのでしょうか?」と聞き返した。「もう一回はっきりとｶﾒﾗに向かって言ってもらえませんか?さっきのはちょっと聞きづらかったから裁判では使えないかも知れないから」と脅したら顔が真っ青になった。何も言わずにﾀﾊﾞｺを消した。勿論ｶﾒﾗなんか付いていなかった。でもお客さんとしては当然録音されていたらとんでもない話だ。常識がちょっとでも通用するお客さんにはこういう風な言葉で対応していた。単に仕事としてお客さんをＡ地点からＢ地点まで乗せているのに何でここまでお客さんと喧嘩しなければいけないのか。目的地で彼を降ろした後、彼はいろいろとぶつぶつ脅しを繰り返していた。

こういう事もあった。一時期町の暴力団ｸﾞﾙｰﾌﾟの動きが活発になっていた。ﾍﾙｽｴﾝｼﾞｪﾙｽに加盟するとかいう事で事件がｴｽｶﾚｰﾄしていった。暴力団のｸﾗﾌﾞﾊｳｽに時々ﾀｸｼｰが呼ばれて彼らの送り迎えをしていた。ある日僕が呼ばれて迎えにいった。ﾀﾊﾞｺを吸っても良いですかと聞かれ禁煙ですので、良かったら喫煙車をお呼びしますと答えた。本当に駄目かと聞かれいつもの決まり文句を言った。「仕方ねぇな」みたいな事を言われて町まで行くだけだから我慢できるだろうと３人が乗り込んできた。暫く走るとﾀﾊﾞｺの箱を取り出していた。まだ何もいう必要はないと思ってどうするかを見ていた。また暫くするとﾗｲﾀｰがﾎﾟｹｯﾄから出された。まだ何も言わなかった。そしてﾗｲﾀｰに火を運転手の反応を探るかのようにつけたり消したりして遊び始めていた。いやな予感がした。念のために禁煙車だという事を言った。お前は黙って走れば良いといわれた。どうも問題を起こしそうなﾀｲﾌﾟだなと思った。しかし絶対にﾀﾊﾞｺを吸わせる訳にはいかなかった。なぜなら誰もﾀﾊﾞｺを吸わないからこそ車はﾀﾊﾞｺの臭いがせず他人にもﾀﾊﾞｺを吸わせない事が出来るのだ。絶対に許すわけにはいかない。予感どおり彼はﾀﾊﾞｺを口に加えﾗｲﾀｰに火を付けた。そして口に近づけた。そこで僕は思いっ切り急ﾌﾞﾚｰｷを踏んだ。彼はｼｰﾄﾍﾞﾙﾄをはめていなかったため両手を車のﾌﾛﾝﾄに付けるほど前に倒れ、ﾀﾊﾞｺは口から落ちてﾗｲﾀｰも落とした。ﾀﾊﾞｺを吸うのなら今車を止めたから外でやってくれとお願いした。「分かったよ、分かったよ!もう良いから走れ!」といわれて物事は収まった。相手が暴力団だから僕は怖くて足腰震えていた。しかし弱いところを見せることは出来ない。そして彼らに限ってこういう扱いを受けても支払いから逃げる事はまず無い事を知っていた。なぜなら、暴力団は元々ﾀｸｼｰ会社が乗せることを嫌がっている。でも理由が無い限り断る事は出来ない。暴力団の方はﾀｸｼｰに乗れなけ